

5/29 – Lecture 4.

「バラの2世紀」

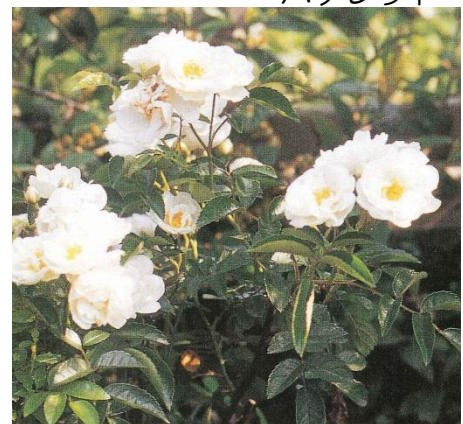
講師：ジャン・ピエール・ギヨ氏

ギヨ一家の一員。前ギヨバラ園オーナー

19世紀のリヨンにおいて、ギヨ一家はバラの開発の分野と、当時の市の名声に大きな役割を果たしていた。父のジャン・バティスト・ギヨは1829年にリヨンに居をかまえ、他の育種家と共にリヨンのバラ文化を発展させる第1人者となっていた。

1849年に父ジャン・バティスト・ギヨによって発明された野生バラへの芽接ぎ技術は、バラ生産を経済的に利益のあるものとし、その発展を可能にした。1842年、父ギヨは、「ラマルティン」と呼ばれるバラを作り出した。これは最初のハイブリッドティーである「ラ・フランス」のように幅広いバラの育種の最初のものだった。1875年に日本からもたらされた種子との幾度もの交配実験により、息子のジャン・バティスト・ギヨは「パケレット」という名前の最初のポリアンタローズを得ることができた。

パケレット



写真出所) 野村和子(著)
『オールド・ローズ花図譜』 小学館

ギヨ一家は世界のバラ生産に独自の位置を占め、多くの新品種を2011年まで作出できたことに感謝している。ジャン・ピエール・ギヨは遺産を相続しなかったため、彼の会社を特別な協会に売った。その協会は現在 Rosaraie Guillot の名で存在している。そして2011年には著しい回復を示したことから意欲的な計画を実施できるようになり、ギヨ社が21世紀に於いて新しい力を得ることができた。多様な投資が、市場の発展に合う市場戦略を最終的に広め、生産手段を現代化し、研究による新環境への順応を可能にしている。

(補足説明)

1875年ギヨが東洋産(日本)のノイバラ系のものとコウシンバラ系のヒメバラとの人口交配によって作った品種は、四季咲小輪房咲きの特徴を持っていた。この系統はポリアンタ・ローズと名付けられたが、多花性で耐病性がある。また北欧でも育つような耐寒性のある品種も開発され、今日でも人気がある。